

特集にあたって

「限界集落」という言葉は、もはや注釈なしで理解されるほどに一般化しつつあるように思われる。一方、愛着ある地域を「限界」と呼ばれることに違和感を持つ人も多い。こうした感情に配慮して新たな名称を取り入れる動きもあるが「限界集落」を置き換えるには至っていない。

これは「限界集落」という用語が、少子高齢化や人口減少といったこれまでにない社会転換期における地域コミュニティの危機的状況について、非常に強いインパクトを持ってひと言で言い表すことができる簡便性を有しているためではないかと考えられる。

しかし「限界集落」と、ひと括りで呼んでしまうとき、集落を支えてきた一人ひとりの住民への視点がすっぱりと抜け落ちてしまう危うさを孕んではないだろうか。また、同じ高齢化率50%以上の集落でも周辺環境によって実態が大きく異なることも忘れてはならない。

四国には中山間地などの条件不利地を中心に、多くの「限界集落」が存在しており、今回の特集では「限界集落」が抱える課題について、地域の実情に即した形で問題提起や取組みの紹介を行った。

いわゆる「限界集落」を切り口に、あるべき地域の姿について、この機会に考えていただければ幸いである。

(編集責任者 栗田史朗)